



高部の水分神社と天明6年の洪水

高部東河戸地域には水分神社という小さな神社があります。その境内には石碑があり、表側に「天明六年七月十七日 天明水神社 洪水記念」、台座部分に「山崩止」と刻まれています。一見すると天明6年(1786)に建てられたものであるかのように見えますが、この碑の裏側には「大正十年春立之」とあり、大正10年(1921)に建てられたものであることが分かります。碑に刻まれた天明6年の洪水とはどのようなものだったのでしょうか。



▲「天明水神社」の碑



▲天明6年の地蔵

史料に記録された天明6年の洪水

『美和村史』によると、個人宅に伝わる「天明飢饉集草稿」という史料に天明6年の洪水について記述があると紹介されています。この史料は子孫に天明期の災害を教訓として残そうと考え、文政3年(1820)に作成されたものです。同史料が収録されている『常陸大宮市近世史料集(一)』で内容を確認すると、天明6年部分に「七月初の頃より日々に雨降、十三日ヨリ十四日の雨頻りにして志やちくを流し外出もならず、(中略)十六日猶々雨つよく山々谷々より洪水湛へ、所々にて数ヶ所の白打川欠田畑を押払ふ事海のこたく汐のわくが如くしておそろしく、夫より十八日空晴快天」とあります。7月16日に洪水が起こり、18日に晴れたと

書かれていることから、碑に刻まれていた天明6年7月17日は降雨の最終日であったこと分かります。神社境内の碑はこの日を洪水の日として刻字していることが分かります。

同史料では洪水被害について「二三日過て村々水損の噂有、先一番にハ高部村東河内猿島坪に六助、猶助とて二軒小百姓有しが、後の高山崩レ落子郷中江横たわりて一つの湖出来たり、二軒の家ハそこのミくずとなる」と記されています。また、水分神社社殿内にある昭和60年(1985)の「水分神社県道改修の為移転新築」という奉額によると「天明六年に於いて山壊に依り川止水致し上下に水分され、治水を祈念して神社を建設」とあります。この2つから考えると、大雨で山が土砂崩れし、緒川支流の東河戸川をせき止め、湖となり、2軒の百姓宅がそこに水没したことが分かります。

天明6年の地蔵と墓石

水分神社から県道32号を高部宿方面に200m程進むと右側の道端に地蔵があります。地域の方の話によると、この地蔵は天明の洪水により亡くなった人々を供養する目的で建てられたものとのこと。この地蔵の台座部分を見ると、「天明六年 丙午之 七月 十七日 為無縁」と刻まれており、先述の史料の記述や碑に刻まれた日付とも一致し、話に信憑性が感じられます。

この地蔵の裏側には3基の墓石があり、その内の1つは命日が地蔵に刻まれた年月日と同じく「天明六丙午 七月十有七日」とあり、「〇〇禅定門」「〇〇禅定尼」と男女の戒名が並んで刻まれています。また、男の戒名の右下には「俗名 直助」とあります。先述の史料にあった水沈した2軒の百姓宅の内の1軒の家主の名前が「猶助」でしたが、どちらも「なおすけ」と読むことができます。もし、この2つの名前が同一人物だとしたら、とても興味深いのですが、残念ながら今回の調査ではそれを特定することは出来ませんでした。

おわりに

水分神社では現在でも毎年8月16日に地域の人々が集まり、水害が起こらないよう祈願する祭礼が行われ、洪水の記憶が語り継がれています。この記事がその記憶をさらに後世に語り継ぐ一助となれば幸いです。

【謝辞】今回の取材では美和地域の河西一良さんにご協力いただきました。

【参考文献】『美和村史』(美和村、1993)、『常陸大宮市近世史料集(一)』(常陸大宮市教育委員会、2009)